

25年度第一回研究会終わるー4月14日(日)

小澤健志「佐賀藩所有のオランダ語の医学書について」は、佐賀藩蘭医学書104冊のヨーロッパでの原点を特定し、専門的には外科書が17冊、解剖学書が10冊、内科書9冊などであり、残存教科書は『オランダの医学雑誌』(1844、8冊)、『医学寄稿論文集』(1825、6冊)、『外科学書』(1831~37、4冊)などであったことなど報告した。好生館が、江戸時代にこれだけの蘭書を、翻訳洋書とともに体系的に医学教育プログラムを実践していたことの先進性に改めて驚かされた。



鍵山稔明「佐賀県の薬学概史」については、我が国薬学史の概観を述べ、ハラタマの後任のゲールツツが薬品試験や薬学教育をしたこと、近代薬学が明治7年の医制公布以後に、当時の衛生局長長与専齋の明治13年の医薬品の規格制定の建議がもとになり、明治19年に第1版日本薬局方がだされたこと、佐賀生まれの丹羽藤吉郎が明治3年(1870)に貢進生として大学南校に入学したこと、佐賀西田代生まれの田原良純が日本初の薬学博士であることなどが報告された。



会員報告では、山田会員からは、京都の蘭方医である新宮涼庭に学んだ馬渡耕雲についての報告があった。

太田善郎(元好生館長)会員からは、好生館跡地利用と資料保存、顕彰碑建設等への提案があり(添付3月17日付佐賀新聞資料)、本会としても、可能な提案はしていきたいという前山会長の発言があった。太田きよ子会員からは、吉野ヶ里遺跡のメガ・ソーラー施設設置について監査請求をせざるをえないとの話があった。

好生館観覧記

好生館新病院開院式に出席して

好天に恵まれた4月19日（金）、佐賀県医療センター好生館の開院記念行事が催された。内覧会に参加することができたので、そのときの写真を紹介する。右は好生館全景。淡いブルーの壁を基調としており、安らぎと癒しを感じる新生好生館のカラーだった。



エントランスホールに入った。吹き抜けの空間は広い。正面の四季をイメージするステンドグラスから差し込む光が柔らかい。屋外庭園の緑も目に優しい。



少し遅れて参加したので、このエントランスホールでのコンサートには間に合わず残念だった。じつはステンドグラスの下を歩くと春の音など四季の音を感じることができる。視覚、聴覚など五感で癒される工夫がある。

しかも、エントランスホールにはサリン事件で聖路加病院が救急医療体制をとることができた教訓が詰まっている。待合室の長椅子は、救急時にワンタッチでベッドに代わる。壁には酸素吸入口が、いくつも取り付けられている。災害に強い新好生館の機能を実質的に備えている。



案内の動線に従って、最上階の8階病室を見学。患者が治療に専念しやすいように、個室を多くしたという。各病室には洗面台とトイレが備え付けられている。食堂もこの階にあり、窓から眺める佐賀平野の光景は有明海のむこうに雲仙岳も望み、絶景である。県庁屋上からの佐賀平野の眺望もよいが、それにまさるともおとらない。サテライトキッチンもあり患者の状況に応じた食事を提供できる。患者は治ってもここに居たがるかもしれないくらい居心地がよさそうだ。患者本位の配慮が行き届いている。



4階に下りると、リハビリテーション室があった。新設の科という。いくつもの用具がゆったりとした空間に整然と配置されている。目を窓の外にむけると、なんと屋外庭園がある。車いすでも出られるようにバリアフリーになっていた。リハビリの患者たちが屋

外庭園を眺め、心を癒されてさらに治療に励むことができるだろう。

救急用大型エレベータで3階に下りると、ハイブリッド手術室があった。室内に高性能の血管造影装置などがあり、カテーテル治療と手術が同室で可能になるという。手術患者の負担を少なくする工夫が感じられた。

この階には屋上庭園もあり、また太陽光発電パネルが設置されていた。資料によれば、この太陽光発電による二酸化炭素削減量は年間986トン、これは杉7万本の二酸化炭素吸収量に相当するという。環境にやさしい新好生館である。

エレベーターで1階に下りた。すると、講演者の日野原重明先生を案内している十時理事長と榎木館長に出会った。日野原先生101歳と6ヶ月というが、耳も達者で、話も明瞭。とても100歳を超えた人の動作ではない。

1階には県立図書館分室があり、患者の要望があれば県立図書館からも本を借りだしてくれるという。病院にいと、暇なときには結構、読書欲がおきるものだ。

分室の中に日野原文庫が備え付けられていた。タイミングよく、日野原先生と榎木館長が司書とともに並んでくれたので、皆の陰からこっそりパチリと撮影。なかなかよい写真になったと自画自賛。



大きな病院に行くと、よく迷うことがある。私は内覧会の出発時間に遅れたので、一人で駆け足で廻ったのだが、動線がはっきりしていたのと、案内表示がさりげなく、とても見やすくできていたので、迷わず、それぞれの印象も強かった。医師・看護師の動線も患者に近く工夫されており、開院してからも、患者・外来者が院内であまり迷うことなく治療を受けられるのだろうことを強く感じた。

1階には食堂があった。焼きたてパンを振る舞ってくれたので、嬉しくて、つい全種類の切り分けパンを賞味した。それぞれ美味しいパンで、心もお腹もふんわり、もちもちとなって、満足して新病院をあとにした。

後日談だが、22日に十時理事長による、新好生館とサガハイマツト（九州国際重粒子線ガン治療センター）のお話も聞いた。人間の尊厳を大切にす医療思想に裏打ちされた素晴らしい設計がなされていることを改めて強く感じた。

会員たより

明治期好生館・佐賀病院の

附属地向陽軒についての資料

佐賀大学医学部の佐藤英俊会員から次の好生館関係資料をいただきました。

佐賀病院附属地向陽軒に付いて本院の意見（明治21年～28年頃）

「佐賀病院附属地向陽軒は曩きに旧藩主より土族土着用地として土族真崎某へ一應下附せられし*ありしも當病院設立に付ては必要欠く可らざる要地なるを以て

御取消けしとなり特別の御詮議を以て當病院へ御下附相成たる地所なるを以て＊必要なるを今更言ふ迄もなく且又本院維持上等に於ては基本財産とも称すへきのみならず患者治療上に於ても亦た欠く可らざる地にして特に萬一市内悪疫流行等あるに際しては避病院の設置を要するは素より言ひを待たす然るに該地たるや空気清涼として四方人家を離し他の傳染等の憂いなく實に一般人民の信認すへき避病院を設置するには極めて適當の場所にして佐賀市全体に＊て衛生上欠く可らざるの要地とす又當時特別の御詮議を以て御下附相成り以旧藩主の御趣意にも相＊り＊儀も之あり旁以て如何の場合なりと申も決して他故の為に流用すへき者に之れ無き者と思ふす」

佐藤英俊訳：佐賀病院附属地元向陽軒に付いて本院の意見

佐賀病院の附属地である元「向陽軒」は、さきに旧藩主（鍋島直正公）より士族が定住する用地として士族真崎某へ一度は御下賜の内示があった。しかし当病院設立にあたっては、必要欠くべからざる地所であったため、その内示は取り消しとなり特別の御詮議をもって当病院へ御下賜された経緯があり、当病院にとって必要であることは今更言うまでもないことである。またこの地は本院の基本財産であるとともに、患者治療上においても欠くべからざる地所である。とくに萬一市内に伝染病などの流行がある場合には、避病院を設置する必要がある。この地は空気清涼として四方は人家から離れており他に伝染する恐れもなく一般の人々も信認する避病院を設置するには極めて適當であり、佐賀市全体にとっても衛生上欠くべからざる地所である。また当時特別の御詮議をもって御下賜された旧藩主の御趣意にも沿うものであり、どんなことがあっても他の目的に流用するべきものではないと考える。

佐藤先生の資料説明とお考えは以下のようです。

旧鍋島藩主所有地「向陽軒」についての資料を書き起こしましたのでお送りいたします。判読不明文字は＊で置き換えました。この資料は、明治21年から28年頃公立佐賀病院好生館医師「池田實先生」が書かれた草稿です。ちなみに便箋は当時の好生館の公用箋「公立好生館」を用いています。この頃は一旦「向陽軒」は好生館の敷地に組み込まれていたが流用する話が持ち上がり、池田實先生が、佐賀市(?)に対して転用しないで欲しい旨を書き記した意見書草稿です。2枚草稿があり1枚目が実際に近いかと思われます。なお、明治22年頃の佐賀城付近の地図が現存しておりますので、場所の特定は可能かと思えます。佐賀医学史研究会が中心となって、是非この「向陽軒」跡地に旧好生館顕彰碑を建立したいものです。

※向陽軒・佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の別荘。

編集後記

▼「医師は職人である。いい仕事ができる「環境」と「道具」が必要」と十時理事長は言い、人に優しく災害に強い新好生館のためにさまざまな工夫がすみずみまで設計されている。▼6月の県内医史跡めぐりは、開業間もなくで迷惑でなかったら、新好生館の見学ができたらいいなとも考え始めた。▼佐藤英俊会員、太田義郎会員から好生館の顕彰についての提案がなされた。安政5年（1858）に設立された好生館では、明治初期にはドイツ医学を医学教育に採用しており、それが我が国全体のドイツ医学導入へとつながった。いわば、我が国近代医学発祥の地ともいえる水ヶ江の好生館である。▼貴重な医学資料も残っている。跡地利用については、難しい問題もあるようだが、顕彰と資料保存・活用を考えていくことが、後世につながるもう一つの仕事と思う。（青木歳幸）